

(様式6-2)

研究成果概要

所属学校名 伊勢市立城田小学校

職・名前 教諭・中北 博子

- 1 事業の名称 特別支援教育内地留学
- 2 留学先の名称 三重大学教育学部
- 3 研究主題 認知の偏りがある子どもへの支援について
～学習指導要領における特別支援教育の視点から～
- 4 研究成果の概要

今回の研究では、次期学習指導要領を特別支援教育の視点から通常学級で支援が必要な子どもについて取り上げ、困難さにつながる認知の特性について整理し、認知の特性から支援につなげるためにできる方策について考察した。以下、各項の要点を示す。

○学習指導要領における特別支援教育～次期学習指導要領（2016年答申より）

答申により示された新しい学習指導要領の特徴や改善点をあげ、特に子ども一人ひとりの発達という視点から、通常学級において子どもの困難さに応じて指導の工夫や手立てが必要とされていることについて述べる。そこには、音韻認識や視覚認知の弱さ、協調運動の困難さなど認知能力を要因とするものが明記されるようになる。認知をもとにした支援や手立てを考えていくことが、これからの通常学級の指導において必要とされる。

○子どもの困難さや認知の特性

子ども一人ひとりの認知の特性を知ることは、適切な指導・支援のために大切な要素の一つである。子どもの困難さは、学習面、行動面に表れ、併せ持っている場合が多いが、学習面での困難さや認知特性として、音韻とワーキングメモリを取り上げる。音韻については、特に、ひらがなの特殊音節のつまずきについて取り上げた。これは、読み書きの障害と関連しており、学習や生活面においても影響が大きい。ワーキングメモリでは、個人差が大きいこと、その個人差は学力にも関係しており、その差は年齢が上がっても変化がないことを述べた。

○認知の特性から支援へつなげるために

認知の特性から支援につなげるためにどのようなことが必要か、一人ひとりの認知の特性につながる支援をしていくために、二つのことについて提案する。一つは、発達障害を障害の有無ではなく「認知の偏り」ととらえることである。「認知の偏り」にはさまざまな偏り方があり、その偏りから特性を見ていけば支援につながる手立てを予測できる。二つめは、通常学級での支援に生かすためには、認知に関する知識を持つことを専門性の一つとして、特別支援コーディネーターに新たな役割を取り入れることである。学校現場では、

WISCの専門的な知識が必要なのではなく、検査結果の分析や所見を学校での支援につなげるための解釈ができる知識が必要である。検査結果にある認知の特徴は、適切な指導につながる重要な情報源である。この知識は、検査ができない場合でも認知の特性を考える手がかりになり、学級担任と子どもの支援を考える際にも役立つものである。特別支援コーディネーターの知識を生かし、学級担任とともに支援を考えていくようなしくみが学校の中でできていくとよいと考える。

最後に、この研究を通して、いくつかの視点を持って支援を考えたり、その子どもに適した支援方法を探したりする手がかりをもつことができた。これから、実際の子どもの実態を観察し、アセスメントを行う経験を積みながら、よりよい支援に向けて実践に取り組んでいきたい。今後、学校の中で、特別支援コーディネーターとして特別支援教育の推進につとめたり、支援の必要な子どもたちにかかわったりする際に役立てたい。